平成23年度　日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅱ
日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築
―第２報―

研究班長　福林　徹[1)]
研究班員　池田　浩[2)]　奥脇　透[3)]　清水　結[4)]　津田　清美[4)]
中田　研[5)]　中堀千香子[6)]　藤谷　博人[7)]　古谷　正博[8)]
松田　直樹[3)]　三木　英之[9)]　宮崎　誠司[10)]
担当研究員　青野　博[11)]

目　　次

緒言…… 3
１．全国的なスポーツ外傷統計
１－１．学校管理下におけるスポーツ外傷発生調査…… 4
１－１－１．中高生の部活動におけるスポーツ外傷発生調査…… 4
１－１－２．柔道・剣道の事故…… 13
１－２．スポーツ安全保険におけるスポーツ外傷発生調査…… 17

２．各競技におけるスポーツ外傷発生調査
２－１．サッカー…… 33
２－２．バスケットボール…… 41
２－３．ラグビー…… 43
２－３－１．ジャパンラグビートップリーグにおける外傷発生調査…… 43
２－３－２．ラグビーにおける頭頚部重症外傷…… 49
２－４．アメリカンフットボール…… 52
２－５．テニス…… 56
２－６．柔道…… 59

３．スポーツ外傷・障害予防プログラムの開発・検証
３－１．サッカー…… 63

１）早稲田大学、２）順天堂大学、３）国立スポーツ科学センター、４）日本バスケットボール協会、
５）大阪大学大学院、６）日本サッカー協会、７）聖マリアンナ医科大学、８）古谷整形外科、９）平塚共済病院、
10）東海大学、11）日本体育協会

緒言
日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築－第２報－

福林　　徹[1)]

2011年は東日本大震災におそわれ未曾有の危機のなか、サッカー女子ワールドカップでのなでしこジャパンの活躍は、国民に大きな希望と活力を与えることになった。2012年はロンドンオリンピックの年であり、日本選手団が各種のスポーツでさらに活躍し､日本に大きな希望を与えることが期待される。その選手の健康と安全を守るために日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築の研究は重要な役割を果たすものと自負している。

昨年度は「日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築－第１報－」をお届けしたが、今回それに一部工夫を重ね、平成22年度～23年度の外傷調査をここに第２報としてお届けする。昨年お願いした各競技に加え本年度はテニスと柔道についても中田先生、宮崎先生に研究班員に入っていただき専門の立場からご報告いただいた。

本年度は昨年度の反省点を生かし、日本におけるスポーツ外傷をさらに詳しく網羅すべく、スポーツ安全協会と日本スポーツ振興センターに昨年度以上のご協力をいただき、詳細な資料の提出を受けた。特に、重症外傷としての頭頸部外傷を保険金支払い10万円以上という定義を基に洗い直し、その実態をスポーツ安全協会と日本スポーツ振興センターの両方で明らかにした。またラクビー協会のご協力により、同協会に報告されている2008年から2011年の重症頭頸部外傷のご報告を本研究報告に載せさせていただいた。またスポーツ安全協会と日本スポーツ振興センターの両方で、競技種目別の外傷の傾向と頻度について人形図などを用いてわかりやすく解説し、現場の指導者に役立つようにした。青少年で比較的頻度が高く、しかも治療に長期間を要する膝前十字靱帯損傷、肩関節脱臼、足関節捻挫、第５中足骨骨折の４外傷については、本年度もその傾向を詳しく調査した。また平成24年４月からの中学校体育での武道の必修化を考慮し、柔道と剣道の外傷の頻度、重症度について記載をした。特にこの二種目については世論の注目度も高く、正規体育授業と部活動を区別し、そこで起きた外傷をきちんと報告していくことが望まれる。

各競技におけるスポーツ外傷発生調査に関しては昨年同様､サッカーJリーグ､Fリーグ､なでしこリーグ､ラクビートップリーグ､女子バスケット日本リーグ（WJBL)、アメリカンフットボール社会人および大学リーグの結果を掲載するとともに、本年度からテニスの国内・国際主要大会での外傷・障害報告を掲載した。

スポーツ外傷・障害予防プログラムの開発・検証に関してはサッカーはJリーグ、なでしこリーグの下部組織、そしてJFAアカデミーに依頼したFIFA11＋の介入の結果を、外傷発生頻度と運動能力レベルの両方からご報告いただいた。

余談となるが、昨年11月に来日されたIOC医事委員のLars Engebretsen先生は、2010年のバンクーバー冬期オリンピックでの外傷・障害の報告書の結果を示されながら、スノーボードクロスでの外傷発生の多さを指摘し、ルール変更を示唆されていた。我々が現在行っている日本におけるスポーツ外傷サーベイランスも、この結果が選手の健康や安全のために、少なからず役立つことを願う次第である。

１）早稲田大学スポーツ科学学術院